年報筑波社会学　第15号（2003），94～98頁.

《書評》

中河 伸俊・北澤 毅・土井 隆義 編『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性』

ナカニシヤ出版，2001年，A 5 版，228頁，2500円.

苫米地　伸

昨今、社会学を中心とする諸学問領域において、「社会構築主義」あるいは「社会構成主義」についての議論が注目を集めている。評者にとっては、「未だに」という思いの方が強いのだが、確かに様々な学会大会などでのテーマセッション等のテーマとして設定されている。ここで評者が「未だに」というのは、おそらく日本の社会学コミュニティにおいて、この「社会的構築」あるいは「社会的構成」という専門用語が用いられるようになったのは、1977年のバーガーとルックマンの著書の翻訳（山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社）以来であるだろうし、1992年のスペクターとキッセの著書の翻訳（村上・中河・鮎川・森訳『社会問題の構築』マルジュ社）以降であると思うからだ。それぞれ25年前と10年前のことであるし、もっと言えば、その原著書はそれぞれ1966年と1977年に出版されていることから考えても、やはり「未だに」あるいは「今さら」という感は拭えない。

そんな状況の中、2001年に２冊の本が出版された。一方が今回書評を託された本書であり、他方が上野千鶴子編による『構築主義とは何か』（岩波書店）であった。両書ともに、「社会構築主義」の多様性に触れつつ、それにまつわる論考が納められている。この点に関しては、両書がともに「社会構築主義」あるいは「社会構成主義」、いやもう少し限定して言うなら「構築主義」という専門用語の流布に一役かっているのは間違いないだろう。

しかし決定的に異なるのは、後者がいささか「散漫な」印象を与えるのに対して、前者つまり本書が一定のまとまりを持っているように読めるという点で

あるだろう。もちろんこれは後者の諸論考が「セクシュアリティ」もしくは「ジェンダー」という概念の下にまとまっているという反論によって、評者の独断が絡みついていると言われても仕方がない（もしそうであるならばやはり『構築主義とは何か』という題名は大きすぎるし、少なくとも「セクシュアリティ」や「ジェンダー」という概念が題名に入るべきだったと思うのではあるが）。それにもかかわらず評者がそう思ってしまうのは、同じ「構築主義」であるのに論者の「棲み分け」がなされているように見えるからなのだ。端的に言って、同じ「構築主義」という言葉が題名に入っているのだが、両方に論考を載せているのは野口裕二（本書4章）のみである。さらに、後者の諸論考の中で前者に直接的に関与している（要するに「載っておかしくない」）論考が野口論文を除いて2つある（赤川論文と北田論文）のに対して、その逆はほとんど考えられない。それは「構築主義の理論を、ジェンダー概念抜きに語ることはできない」（『構築主義とは何か』281頁）という一言によって代表／表象されているように、「構築主義」という概念が、ある意味で「狭い」領域的な概念と結びつけられてしまったからなのではないか（念のため記しておくが、評者は「ジェンダー」という概念の重要性を否定しているのではない）。そしてこの点で、書評を託された本書は、そういった領域的な問題によってではなく、「構築主義」の名の下にまとまっていると思うのである。本書第Ⅰ部における、エスノメソドロジーと「構築主義」との関係について論じている岡田論文（2章）はもとより、3章のルーマンのいう「理論の失敗」を方法論的に「構築主義」と関連させて論じた馬場論文もまた、一見すればかけ離れているように思われるが、十分にまとまりを崩さずに納められていると読めるのである。

前置きが長くなってしまった。本書が出版されて、すでに2年の月日が経っている。その間に、すでにいくつかの書評が刊行されており（例えば『社会学評論』53-2, pp. 142-143での徳永勇による書評など）、その中で本書の内容について簡潔に述べられている。さらに言うなら、本書の1章「Is Constructionism Here to Stay? ——まえがきにかえて——」の中で、編者自身によって目配せの利いた要約がなされている。一つ一つの章毎に内容を紹介するのは「蛇足」というものであろう。そこでここでは、評者が「構築主義的探求の日本での定

着へ向けての、一つの里程標を提供」[3] していると評価できるのか、できないのかということについて考察をしてみたい。つまり、日本での構築主義的研究が、単なる「方法論のジャングル」(中河伸俊『理論と方法』16-1, pp. 31-46、数理社会学会) に迷い込むだけではなく、経験的な研究のアウトプットを出すことができるかどうかにかかっていると思うからである。そのことが現れているのは、第Ⅱ部において展開されている事例研究編においてである。そのため、以下では特にこの事例研究編を中心にして考察を進めたい。

まず注目したいのは、各論考が「何をデータとしたモノグラフであるか」である。何も難しいことを言っているのではなくて、要するにそのマテリアルが何かということだ。5章の工藤論文では、いわゆる「草ネット」上での書き込み (これが現在大流行の「2ちゃんねる」のような掲示板スタイルか、あるいは大手商用ネットの会議室のようなものかは判然とはしない) と直接的な聞き取りが少しである。6章の栗岡論文は、公刊された「薬害被害者」の手記がデータである。7章の北澤論文では、少年犯罪に関するマスコミの報道と、事件とされた出来事の供述調書が提示されている (但し、昨年出版された北澤毅・片桐隆嗣『少年犯罪の社会的構築』東洋館出版社を参照して頂ければ、その背後には膨大なあらゆる種類のデータがあったことに気付かされる)。8章の土井論文は、「ある暴力事件」をめぐる新聞記事、そして福祉施設のケースワーク記録と業務日誌、並びに家庭裁判所への意見書、中学校の報告書、そして双方へのインタビューである。9章の野村・上野論文では、「児童虐待」について述べられた雑誌論文の事例が主である。10章の足立論文は、「伝統芸能」についての郷土史家へのインタビューである。11章の上石論文は、司法試験改革についての弁護士へのインタビューがそのデータである。

こうして眺めてみると、各論考が幅広い種類のデータを基にして書かれていることがわかる。いわゆる質的な研究におけるデータが網羅されているといってもよい (厳密に言えば映像資料がないのだが)。この質的なデータを扱うことと現在の「構築主義」という言葉の流布が、密接な関係を持っているのは確かなことだろう。それは、ともすれば統計的調査研究、いわゆる量的な研究の補足的な「端役」とされてきた質的なデータが、言ってみれば「主役」に立つことを認められたと解釈することも可能である。ここには大げさかもしれないが、

いわゆる「言語論的転回」あるいは「語用論的転回」以後の研究が必要とする質的なデータの重要性が示されていると考えられるのである。

ただ、ここで注意したいのは、本書が様々な質的な研究を集めた論集であるということだけではなくて、それぞれがその課題設定と使用しているデータの関係という点で「無理がない」ということなのである。工藤論文では「メンバー自身が『クレイム申し立て活動』を具体的なやりとりの中で『産み出す』瞬間を捉えること」[82] を示すのが、その設定である。そのためのネットの書き込みであった。栗岡論文では、「『薬害』を理解するためには……このことばがある種の社会現象に対するカテゴリーとして定着した過程を分析」[98] するための手記である。北澤論文では、「出来事と当事者がどのように結びついているか」[115] を示すための供述調書などのテクストであり、土井論文での福祉施設の内部文書や中学校の報告書などのデータは、「司法の介入する以前の人々の相互作用場面」における「紛争の認識がいかに構築されていくか」[133] をその課題としたものだった。野村・上野論文が雑誌論文中の児童虐待事例を用いたのは、「この問題の被構築性に迫」[157] ることにあったからだし、足立論文での郷土史家へのインタビューは、「いかにして郷土史家は伝統文化の独自性という“あいまいさ”を“あいまい”なまま管理するのか」[176] を知るためである。上石論文では、司法試験改革という問題について「弁護士がこの問題への対処を語る中でいかなる自己像を構築していたのか」[197] を明らかにするための弁護士へのインタビューなのだ。

この課題設定とデータの関係に「無理がない」ということは、研究者にとって当たり前のことであろう。それこそ「今さら」だ。しかし、「さまざまな事象を……『社会的に構築されている』」[5] とし、その意味や相互作用を研究対象とする「構築主義」的研究では、最も重要とされることなのである。スペクターとキッセが『社会問題の構築』の中でマートンの社会問題論を批判しながら強調したのも、経験的研究の可能性を示すことであった。一口に「言語や意味に着目する」「相互作用過程に注目する」と言っても、それがどのような形で研究という営みになるのかを示すことは容易ではない。だからこそ「言語論的転回」や「語用論的転回」以後の議論が、「方法論のジャングル」と化してきたのだろう。「構築主義」が、単なる「知的流行（ファッド）」[3] で終わらないためには、その

経験的な研究を示していくこと、その蓄積が必要なのである。その一つの在り方として、本書は読まれるべきであろうし、実際にそれを示しているのだと評者は考える。要するに、本書はもっと読まれていいはずの著書であり、十分に「一つの里程標を提供」していると評価できるのである。

最後に一言付け加えておきたいことがある。前出の中河による1章において記されていることだが、確かに本書では「参与観察によるエスノグラフィー路線が手薄」[15] である。つまり、上記のデータの種類を見て頂ければ分かるように、いわゆる言説分析的な、あるいはテクスト分析的な論考が主である。このことはもしかしたら「構築主義」的な研究のみに関係するものではないかもしれないが、インテンシブなフィールドワークをもとにしたエスノグラフィカルな調査研究が、より多く研究・発表されていくことに期待したい。例えば、アメリカにおいて「エスノメソドロジーの知見を取り入れた構築主義」を標榜するグブリアムとホルスタインの活躍などを見てもわかるように、エスノグラフィカルな研究に対する見方には、日本と欧米とではかなりの温度差がある。この温度差がなくなるようなエスノグラフィカルな研究が必要であるし、そのことに関して「構築主義」的な経験的研究は貢献するはずである。この少々「身勝手な」期待が単なる期待に終わらないことを念じて、書評を閉じることにしたい。

（とまべち　しん／母子愛育会）